

【資料】大連日本人学校の生徒の日本語能力・学力を高めるために

◆単元づくりの考え方

担任・授業者は、各学年・学級の実態について「JSL評価参照枠（ルーブリック）」に当てはめ実態を把握する。その上で、目標・テーマ（児童生徒につけたい力）を設定し、その手立てとして以下の【1】～【4】の4観点を意識した単元づくりを行う。

【1】「つかむ・わかる」

学習課題を把握する。どのような学習を通して、何を身につけるかを理解する。
既習事項・生活経験などと学習を結びつける。
基礎的な知識・学習言語の習得（教員による視覚的アプローチ・反復学習等）

【2】「つかう・伝える」

身につけた知識・言語等を活用した学習。（思考力・判断力）
他者意識を重視した表現の工夫（発表・プレゼン・スピーチ等）
双方向に意見を伝え合う活動等。（※話し合い活動）

【3】「広げる・深める」

他者の意見や思いを理解して受け止め、自身の意見や思いと比較し、自身の意見・思い・価値観を深める機会の設定。
話し合い活動・振り返り・ワークシート等。

【4】「評価・動機づけ」

教員による評価。児童生徒の自己評価及び相互評価。
自己の成長を実感するとともに、さらなる学習に向かう動機づけを行う。
（学習意欲を育てる）

各単元・各授業の中で、4観点をバランス良く設定することや、1観点を重点的に行うことなど、単元構成はそれぞれの授業者の創意工夫によるものとする。

（例1）「学習言語の語彙が弱い」という実態がある学級

→【1】「つかむ・わかる」について重点的に指導する。視覚化による授業づくり等。

（例2）「表現が苦手」という実態がある学級

→【2】「つかう・伝える」について重点的に指導する。プレゼン・話し合い等。

※「ユニバーサルデザイン」について

視覚的アプローチをはじめ、ユニバーサルデザインには学習の遅れを生じさせにくいというメリットがある反面、児童生徒の「考え出す機会」を与えにくいというデメリットもある。児童生徒の実態に応じ、目標・テーマを設定して4観点の配置を工夫していく必要がある。

◆生徒の自己肯定感を育てる活動

生涯にわたって良さを発揮する子どもの育成のため、現在もしくは近い将来、生徒が直面するであろう「アイデンティティの揺らぎ」に対応する力・資質を育てる必要がある。その力・資質の根幹となるのは、「自己肯定感」であると考えられる。

また、昨年度の見学生徒アンケートの結果から、特に高学年～中学部において「表現・考えや思いを伝えること」に対する苦手意識が見られる。さらに、アンケート結果・記述を分析すると、表現技法に対する苦手意識だけではなく、コミュニケーションに対する意識の表れであると考えられる。

様々な価値観を受容した上で、自身の考えや思いをしっかりと表現するために、そのスキルを身につけると同時に、生き生きと良さを発揮するための「自己肯定感」を確実に育てる必要がある。

今年度は、とりわけ中学部の教育活動において、特別活動の時間（ピア・サポートプログラム）・道徳の時間・総合的な学習の時間を中心に実践・見取りを行うこととする。

◆研究の構造図（単元づくりについて）

